



アジアンパーティーは、「アジアと創る」をコンセプトに、アジアの人、モノ、情報が集う社交場をイメージしています。

今年は、主要事業である「福岡アジア文化賞」「アジアフォーカス・福岡国際映画祭」、「Fukuoka Asian Party」の三つを柱に、民間企業・団体等と連携した様々なイベントを開催し、全20事業で過去最高となる約57万人に参加いただきました。



アジアフォーカス・福岡国際映画祭 2015.9.18 Fri - 25 Fri



Fukuoka Asian Party 2015.10.9 Fri - 11 Sun



関連イベント 2015. September - October

発行／福岡アジア文化賞委員会事務局  
〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1 福岡市総務企画局国際部内  
TEL 092-711-4930 FAX 092-735-4130  
Email:acprize@gol.com <http://fukuoka-prize.org/>



第26回

FUKUOKA PRIZE 2015

# 福岡アジア文化賞

アジアと創る。アジアを考える。

報告書

主催 福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団  
後援 外務省、文化庁



# 福岡アジア文化賞の受賞者

= 創設特別賞 = 大賞 = 学術研究賞 = 芸術・文化賞

- ネパール  
第15回 ラーム・ダヤル・ラケシュ (民俗文化研究者)
- パキスタン  
第7回 ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン (カウワーリー歌手)  
第17回 アクシムフティ (民俗文化保存専門家)
- インド  
第2回 ラヴィ・シャンカール (音楽家・シタール奏者)  
第5回 パドマー・スブラマニヤム (舞踊家)  
第8回 ロミラ・ターパル (歴史学者)  
第15回 アムジャッド・アリ・カーン (サロッド奏者)  
第18回 アシシュ・ナンディ (社会・文明評論家)  
第20回 パルタ・チャタジー (政治学・歴史学者)  
第23回 ヴァンダナ・シヴァ (環境哲学者)  
第24回 ナリニ・マラニ (アーティスト)  
第26回 ラーマチャンドラ・グハ (歴史学・社会学者)
- アジア以外の国・地域
- イギリス  
第1回 ジョゼフ・ニーダム (中国科学史研究者)
- アイルランド  
第11回 ベネディクト・アンダーソン (政治学者)
- オーストラリア  
第5回 王 廣 武 (歴史学者)  
第13回 アンソニー・リード (歴史学者)  
第24回 テッサ・モーリス＝スズキ (アジア地域研究者)
- フランス  
第20回 オギュスタン・ベルク (文化地理学者)
- ドイツ  
第22回 ニールズ・グッチョウ (建築史家・修復建築家)
- アメリカ  
第2回 ドナルド・キーン (日本文学・文化研究者)  
第3回 クリフォード・ギアツ (文化人類学者)  
第6回 ナム・ジュン・パイク (ビデオアーティスト)  
第9回 スタンレー・J・タンバイア (人類学者)  
第21回 ジェームズ・C・スコット (政治学者・人類学者)  
第25回 エズラ・F・ヴォーゲル (社会学者)

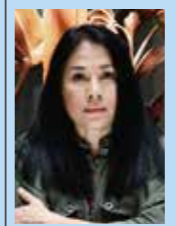
- 中国  
第1回 巴 金 (作家)  
第4回 費 孝 通 (社会学・人類学者)  
第7回 王 仲 殊 (考古学者)  
第13回 張 芸 謀 (映画監督)  
第14回 徐 冰 (アーティスト)  
第15回 厲 以 寧 (経済学者)  
第17回 莫 言 (作家)  
第20回 蔡 國 強 (現代美術家)
- モンゴル  
第4回 ナムジリン・ノロバンザト (音楽家)  
第17回 シャグダリン・ビラ (歴史学者)
- 香港  
第19回 アン・ホイ (映画監督)  
第25回 ダニー・ユン (文化クリエイター)
- 台湾  
第10回 侯 孝 賢 (映画監督)  
第18回 朱 銘 (彫刻家)
- ラオス  
第16回 ドアンドゥアン・ブンニャウォン (織物研究者)
- ベトナム  
第7回 ファン・ファイ・レ (歴史学者)  
第26回 ミン・ハン (ファッションデザイナー)
- カンボジア  
第8回 チェン・ポン (劇作家・芸術家)  
第22回 アン・チュリアン (民族学者・クメール研究者)
- フィリピン  
第3回 レアンドロ・V・ロクシン (建築家)  
第12回 マリルー・ディアス＝アバヤ (映画監督)  
第14回 レイナルド・C・イレート (歴史学者)  
第23回 キドラット・タヒミック (映画作家)
- マレーシア  
第4回 ウンク・A・アジズ (経済学者)  
第11回 ハムザ・アワン・アマット (影絵人形遣い)  
第13回 ラット (マンガ家)  
第19回 シャムスル・アムリ・バルディーン (社会人類学者)
- シンガポール  
第10回 タン・ダウ (ビジュアルアーティスト)  
第14回 ディック・リー (シンガーソングライター)  
第21回 オン・ケンセン (舞台芸術家)
- ミャンマー  
第11回 タン・トゥン (歴史学者)  
第16回 トー・カウ (図書館学者)  
第26回 タン・ミン・ウー (歴史学者)
- スリランカ  
第13回 キングスレー・M・デ・シルワ (歴史学者)  
第15回 ローランド・シルワ (文化遺産保存建築家)  
第19回 サヴィトリ・グナセーカラ (法学者)
- バングラデシュ  
第12回 ムハマド・ユヌス (経済学者)  
第19回 フォリダ・パルビーン (音楽家)
- タイ  
第1回 ククリット・プラモート (作家・政治家)  
第5回 スパトラディット・ディッサクン (考古学・美術史学者)  
第10回 ニティ・イヨウシーウォン (歴史学者)  
第12回 タワン・ダッチャニー (画家)  
第18回 シーサク・ワンリポードム (人類学・考古学者)  
第23回 チャンウィット・カセートシリ (歴史学者)  
第24回 アピチャッポン・ウィーラセタクン (映画作家・アーティスト)
- インドネシア  
第2回 タウフィック・アブドゥラ (歴史学者・社会学者)  
第6回 クンチャラニングラット (文化人類学者)  
第9回 R. M. スダルソ (舞踊家・舞踊研究者)  
第11回 プラムディヤ・アナンタ・トゥール (作家)  
第23回 クス・ムルティア・パク・ブウォノ (宮廷舞踊家)  
第25回 アジュマルディ・アズラ (歴史学者)



第26回大賞受賞者  
タン・ミン・ウー



第26回学術研究賞受賞者  
ラーマチャンドラ・グハ



第26回芸術・文化賞受賞者  
ミン・ハン

- 日本  
第1回 黒澤 明 (映画監督)  
第1回 矢野 暢 (社会学者)  
第2回 中根 千枝 (社会人類学者)  
第3回 竹内 實 (中国研究者)  
第4回 川喜田 二郎 (民族地理学者)  
第5回 石井 米雄 (東南アジア研究者)  
第6回 辛島 昇 (歴史学者)  
第7回 衛藤 藩吉 (国際関係研究者)  
第8回 樋口 隆康 (考古学者)  
第9回 上田 正昭 (歴史学者)  
第10回 大林 太良 (民族学者)  
第12回 速水 佑次郎 (経済学者)  
第14回 外間 守善 (沖縄学者)  
第17回 濱下 武志 (歴史学者)  
第20回 三木 稔 (作曲家)  
第21回 毛里 和子 (現代中国研究者)  
第24回 中村 哲 (医師)

- 韓国  
第3回 金 元 龍 (考古学者)  
第6回 韓 基 彦 (教育学者)  
第8回 林 権 澤 (映画監督)  
第9回 李 基 文 (言語学者)  
第16回 任 東 権 (民俗学者)  
第18回 金 徳 洙 (伝統芸能家)  
第21回 黄 秉 翼 (音楽家)  
第22回 趙 東 一 (文学者)

## CONTENTS

福岡アジア文化賞の受賞者 ..... p01-02

福岡アジア文化賞とは ..... p03-04

第26回受賞者

大賞 タン・ミン・ウー ..... p05

学術研究賞 ラーマチャンドラ・グハ ..... p06

芸術・文化賞 ミン・ハン ..... p07

授賞式 ..... p08~12

市民交流事業

タン・ミン・ウー ..... p13

ラーマチャンドラ・グハ ..... p14

ミン・ハン ..... p15

国際交流基金アジアセンターとの共催企画 ..... p16

記者会見および広報活動など ..... p17~18

歴代受賞者名鑑 ..... p18~22



# 福岡アジア文化賞とは

## 福岡アジア文化賞の趣旨

アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統を守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバル化時代の到来により、文化にも画一化の波が押し寄せ、アジア固有の文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、独自の文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって福岡アジア文化賞を

創設しました。以来、多くの素晴らしい受賞者に賞を贈り、その広がりアジアのほぼ全域にわたっています。

未来へつなげる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存、継承するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからも都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。

**1. 目的** アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績を挙げた個人又は団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

## 2. 賞の内容

### 大賞

賞金 ¥5,000,000

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより、世界に対してアジアの文化の意義を示した個人又は団体。

### 学術研究賞

賞金 ¥3,000,000

人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体。

※「学術研究」には歴史学、考古学、文化人類学、社会学、政治学、経済学などが含まれる

### 芸術・文化賞

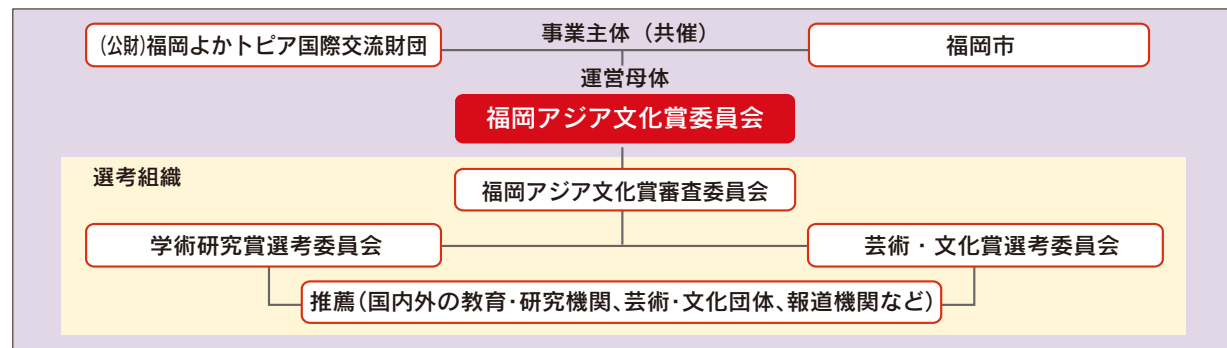
賞金 ¥3,000,000

アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成又は発展に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体。

※「芸術・文化」には美術、文芸、音楽、演劇、舞踊、映像、建築、伝統文化、民族文化などが含まれる

**3. 対象圏域** 東アジア、東南アジアおよび南アジア地域

**4. 主催** 福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団\*



\*福岡よかトピア国際交流財団:アジア太平洋博覧会—福岡'89の成功を記念するとともに、アジアに開かれた福岡の歴史、文化、その他の特性を生かした国際交流を促進する活動を行うことにより、市民一人ひとりが多様性を認め合いながら国際的な相互理解を深める多文化共生社会の実現に寄与し、地域の発展と国際平和に貢献することを目的としています。

## 第26回福岡アジア文化賞のあゆみ

2013.07	54か国・地域約7,700人に第26回受賞候補者の推薦を依頼	2015.06	文化賞委員会(19日)にて3人の受賞者を承認
2015.02	学術研究賞(10日)、芸術・文化賞(5日)各選考委員会にて、推薦された30か国・地域の受賞候補者251名について選考	2015.07~08	ベトナム(ハノイ)記者会見(7月7日) インド(ニューデリー)記者会見(7月24日) ミャンマー(ヤンゴン)記者会見(8月9日)
2015.03	審査委員会(4日)にて審査	2015.09	授賞式(17日)、学校訪問(18日、19日)、市民フォーラム(19日、20日) 国際交流基金との共催企画で受賞者特別イベントを開催(19日)
2015.05	審査・選考合同委員会(8日)		

## 福岡アジア文化賞委員会委員

2015年12月現在

特別顧問	青柳正規	文化庁長官	委員	佐藤靖典	福岡市レクリエーション協会副会長
〃	新美潤	外務省国際文化交流審議官	〃	柴戸隆成	株式会社福岡銀行取締役頭取
〃	小川洋	福岡県知事	〃	城本勝	日本放送協会福岡放送局長
名誉会長	高島宗一郎	福岡市長	〃	久保田勇夫	株式会社西日本シティ銀行取締役会長
会長	磯山誠二	(公財)福岡よかトピア国際交流財団理事長	〃	竹島和幸	西日本鉄道株式会社代表取締役会長
副会長	久保千春	九州大学総長	〃	竹田浩三	九州運輸局長
〃	おばた久弥	福岡市議会議長	〃	多田昭重	福岡文化連盟理事長
〃	貞刈厚仁	福岡市副市長	〃	田中しんすけ	福岡市議会第1委員会委員長
監事	谷川浩道	福岡市社会福祉協議会会長	〃	田中優次	西部ガス株式会社代表取締役会長
〃	清原英明	福岡市会計管理者	〃	中井一平	読売新聞西部本社代表取締役社長
委員	荒牧智之	九州電力株式会社代表取締役副社長	〃	平岡啓	日本経済新聞社常務執行役員西部支社代表
〃	石田正明	福岡市議会副議長	〃	藤永憲一	株式会社九電工代表取締役会長
〃	浦田喜久子	日本赤十字九州国際看護大学学長	〃	町田智子	朝日新聞社取締役西部本社代表
〃	大曲昭恵	福岡県副知事	〃	八尾坂修	福岡市教育委員会委員長
〃	唐池恒二	九州旅客鉄道株式会社代表取締役会長	〃	山口政俊	福岡大学学長
〃	川崎卓生	西日本新聞社代表取締役社長	〃	山本盤男	九州産業大学学長
〃	岸本隆也	毎日新聞社取締役西部本社代表福岡本部長	〃	K.J. シャフナー	西南学院大学学長
〃	岸本吉生	九州経済産業局長			

(委員名は50音順、敬称略)

## 第26回福岡アジア文化賞 審査・選考委員

### 福岡アジア文化賞審査委員会

委員長 久保千春  
九州大学総長  
福岡アジア文化賞委員会副会長

副委員長 貞刈厚仁  
福岡市副市長  
福岡アジア文化賞委員会副会長

委員 石坂健治  
日本映画大学教授  
東京国際映画祭プログラミング・ディレクター  
芸術・文化賞選考委員会副委員長

委員 清水展  
京都大学東南アジア研究所教授  
学術研究賞選考委員会委員長

委員 竹中千春  
立教大学法学部教授  
学術研究賞選考委員会副委員長

委員 柄博子  
国際交流基金 理事

委員 土屋直知  
株式会社正興電機製作所代表取締役会長

委員 藤原恵洋  
九州大学大学院芸術工学研究院教授  
芸術・文化賞選考委員会委員長

### 福岡アジア文化賞選考委員会 学術研究賞

委員長 清水展  
京都大学東南アジア研究所教授  
福岡アジア文化賞審査委員会委員

副委員長 竹中千春  
立教大学法学部教授  
福岡アジア文化賞審査委員会委員

委員 天児慧  
早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

委員 木宮正史  
東京大学大学院総合文化研究科教授

委員 河野俊行  
九州大学大学院法学研究院教授

委員 清水一史  
九州大学大学院経済学研究院教授

委員 新田栄治  
鹿児島大学名誉教授

委員 脇村孝平  
大阪市立大学大学院経済学研究院教授

### 福岡アジア文化賞選考委員会 芸術・文化賞

委員長 藤原恵洋  
九州大学大学院芸術工学研究院教授  
福岡アジア文化賞審査委員会委員

副委員長 石坂健治  
日本映画大学教授  
東京国際映画祭プログラミング・ディレクター  
福岡アジア文化賞審査委員会委員

委員 後小路雅弘  
九州大学大学院人文科学研究院教授

委員 内野儀  
東京大学大学院総合文化研究科教授

委員 宇戸清治  
東京外国語大学名誉教授

委員 川村湊  
法政大学国際文化学部教授

委員 小西正捷  
立教大学名誉教授

委員 寺内直子  
神戸大学大学院国際文化学研究院教授

2015年9月現在

## 第26回 大賞 受賞者



### タン・ミン・ウー

ミャンマー／歴史学

Thant Myint-U

#### ●主な経歴

- 1966 米国ニューヨーク生まれ
- 1987 ハーバード大学卒業(行政学・経済学)
- 1991 ジョンス・ホプキンス大学高等国際関係大学院修士号(国際関係論・国際経済学)
- 1992-1993 国際連合カンボジア暫定統治機構(フノンベン)人権部門長アシスタント
- 1994-1995 国際連合保護軍ボスニア・ヘルツェゴヴィナ司令部(サラエボ)チーフ広報官
- 1995-1996 国際連合ボスニア・ヘルツェゴヴィナ・ミッション事務総長特別代表室(サラエボ)政務官
- 1996 ケンブリッジ大学博士号(歴史学)
- 1996-1999 ケンブリッジ大学トリニティーカレッジフェロー
- 2000-2002 国際連合人道問題調整事務所(ニューヨーク)政策アドバイザー
- 2002-2005 国際連合政治局(ニューヨーク)政策企画チーフ(2003年まで副チーフ)
- 2005-2006 国際連合事務総長室(ニューヨーク)上級政務官
- 2006-2007 国際平和アカデミー上級客員フェロー  
アジアにおける紛争予防と平和フォーラム特別顧問
- 2008-2010 東南アジア研究所(シンガポール)上級客員フェロー
- 2010- ミャンマー生活・食料安全保障トラストファンド役員
- 2011- ミャンマー開発資源研究所上級リサーチフェロー
- 2012- ヤンゴン・ヘリテージ財団会長  
ミャンマー平和センター特別顧問  
ミャンマー国家経済社会諮問評議会評議員  
世界経済フォーラム東南アジア部会副議長  
フォーリン・ポリシー誌(米国)の世界の知識人100人に選出  
プロスペクト誌(英国)の世界の知識人50人に選出  
第26回アジア太平洋賞特別賞(毎日新聞社・アジア調査会共催)  
『ビルマ・ハイウェイ—中国とインドをつなぐ十字路』にて)
- 2013
- 2014

#### ●主な著作

- ◆ *The Making of Modern Burma*, ケンブリッジ: ケンブリッジ大学出版社, 2000.
- ◆ *The River of Lost Footsteps: A Personal History of Burma*, ニューヨーク: ファラー・ストラウス&ジュー; ロンドン: フェイバー&フェイバー, 2006.
- ◆ *Where China Meets India: Burma and the New Crossroads of Asia*, ニューヨーク: ファラー・ストラウス&ジュー; ロンドン: フェイバー&フェイバー, 2011.
- ◆ 『ビルマ・ハイウェイ—中国とインドをつなぐ十字路』秋元由紀訳, 白水社, 2013.

#### ●贈賞理由

タン・ミン・ウー氏は、グローバルな視点から祖国ミャンマー(ビルマ)の歩みを明晰な文章で描き出す、傑出した歴史家である。また、国際連合でカンボジアや旧ユーゴスラビアの平和構築に務めた経験を生かし、自国の国民統合の課題に取り組む、平和創造の実践家である。

タン・ミン・ウー氏は、1966年米国ニューヨーク市で生まれ、ハーバード大学を卒業し、ジョンス・ホプキンス大学高等国際関係大学院で修士号(国際関係論・国際経済学)を取得した。1992年から国際連合の一員としてカンボジア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナで平和構築活動に従事し、1996年英国ケンブリッジ大学にて博士号(歴史学)を取得した。

最初の大作『The Making of Modern Burma(近代ビルマ形成史)』(2000年)では、国民的なアイデンティティや近代国家の骨格が英国植民地時代の19世紀後半以降に形成されたこと論じ、注目を浴びた。次の『The River of Lost Footsteps(消え去った足跡の川)』(2006年)では、家族や人々の歴史を辿りながら、祖国の歩みを多角的に描写した。最新作『ビルマ・ハイウェイ—中国とインドをつなぐ十字路』(2011年)では、成長大国の中国とインドに隣接するミャンマーの歴史を、辺境の国境地帯や社会の底辺の人々の視点から問い直し、過去・現在・未来を貫く独特のダイナミズムをもって論じた。同書は邦訳され、2014年第26回アジア・太平洋賞特別賞(毎日新聞社・アジア調査会共催)を受賞した。

歴史家タン・ミン・ウー氏の筆致は独特である。氏は第3代国際連合事務総長であった祖父のウ・タント氏の葬儀の

折りに初めて祖国の土を踏み、以来、幼い頃から休暇のたびに家族で帰郷したという。この体験を拠り所にするように、自分の足で歩き、自分の目で見、自分の耳で人々の話を聞き、それらを土台に歴史を物語る氏の美しい文章には、穏やかに人々の心を開かせる力が秘められている。

タン・ミン・ウー氏は2010年より活動拠点を米国からミャンマーのヤンゴン市に移した。2012年にヤンゴン・ヘリテージ財団を設立し、貴重な歴史的建造物の保存に尽力し、持続可能な都市計画についてヤンゴン市に助言を行っている。また、テイン・セイン大統領の諮問評議会の評議員やミャンマー平和センターの特別顧問を務め、政府と諸民族との間で締結された停戦協定合意(2015年3月)の実現に大きく貢献した。

このように、タン・ミン・ウー氏は歴史研究のみならず、政府や市井の人々と語り合い、積極的に問題解決の道を模索する新しいタイプの知的指導者である。国際的にも、世界経済フォーラム東南アジア部会副議長としての活動や国際連合大学での講演など、国境を越えた市民や若者との討論を通して、ミャンマー発の柔軟な見解を発信し、高い尊敬を集めている。

今日のミャンマー社会には、グローバリゼーションの高波に晒されながらも、長い間の孤立を克服して明日に向かって歩み出した人々の強い希望が溢れている。その激動の中で、一人一人の国民の心に寄り添い、誇り高い国民の歴史を綴り、さらに国際社会と手を結ぶミャンマーの未来を築こうとするタン・ミン・ウー氏の歴史家としての果敢な取り組みは、まさに「福岡アジア文化賞 大賞」にふさわしい。

## 第26回 学術研究賞 受賞者



### ラーマチャンドラ・グハ

インド／歴史学・社会学

Ramachandra Guha

#### ●主な経歴

- 1958 インド、デーラ・ドゥーン生まれ
- 1977 デリー大学卒業(経済学)
- 1979 デリー大学修士号(経済学)
- 1985 インド経営研究所コルカタ校博士号(社会学)
- 1985-1995 インド、ヨーロッパ、北米にて学術関係職
- 1995- 執筆活動に専念
- 1997-1998 カリフォルニア大学パークレー校客員教授
- 2004 インド科学研究所客員教授
- 2004- ニューインディアファウンデーション共同設立・運営
- 2008 オスロ大学客員教授
- 2011-2012 ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス客員教授
- 2014 イェール大学名誉博士号(人文科学)

#### ●主な著作

- ◆ *The Unquiet Woods*, パークレー: カリフォルニア大学出版社, 1989.
- ◆ *This Fissured Land* (共著), ニューデリー: オックスフォード大学出版社, 1992.
- ◆ *India After Gandhi: The History of the World's Largest Democracy*, 英国: マクミラン; 米国: エコープレス/ハーバード・コリンズ; インド: ピカドール, 2007.
- ◆ 『インド現代史』佐藤宏訳, 明石出版, 2012.
- ◆ *Gandhi Before India*, 英国: アレン・レーン; インド: ペンギン; 米国: クノッフ, 2014.

#### ●贈賞理由

ラーマチャンドラ・グハ氏は、インドを代表する歴史家である。民衆の側に立った「環境史」の地平を切り開くことによって、インドのみならず国際的にも高く評価されるようになった。さらに、2007年に出版した『インド現代史』において、独立後のインドにおける民主主義の実像を生き生きと描き出した。同書は大部の著作であるにもかかわらず広範に読まれ、その業績によって氏は歴史家としての地歩を不動のものとした。

グハ氏は、1958年インドのヒマラヤ山麓にあるデーラ・ドゥーンに生まれた。父は、この地の森林調査研究所に勤める研究者であった。デリー大学で修士号(経済学)を取得後、コルカタにあるインド経営研究所で博士号(社会学)を取得した。この学位論文が、出世作となる『The Unquiet Woods(鳴動する森林)』(1989年)に結実した。同書は、インド・ヒマラヤにおける森林破壊への民衆による抵抗運動を英領期にまで遡って描いた歴史社会学的な著作であり、インド環境史の先駆的な著作として注目された。その後、優れた共著者(M・ガドギル氏)を得て、『This Fissured Land(このひび割れた大地)』(1992年)や『Ecology and Equity(生態環境と公正)』(1995年)などの著作を出版し、同国における環境史および環境思想の分野の研究や議論の隆盛を導いた。さらに、『Environmentalism(環境主義)』(2000年)では、インドを超えて世界の環境運動および環境思想の歴史的展開を、発展途上国の民衆という視角も加えつつ描き出した。

グハ氏が開拓した分野は「環境史」にとどまらない。なかでもクリケットの歴史に関する著作では、もともと旧宗主

国イギリスのスポーツであったクリケットが、どのようにしてインドの国民的スポーツとして定着したのかが描き出されている。カーストやナショナリズムといったインド近代史の重要なテーマと重ね合わせられつつ、クリケットに関わった人々の姿が活写され、インド社会史の著作として傑出した作品である。

そして、歴史家としての実力を真に示すことになったのは、『インド現代史』の出版である。今日のインドは、著しい経済成長のみならず「世界最大の民主主義国」として注目されている。大国インドが言語、民族、宗教、カーストなどさまざまな意味で多様性を抱えながらも、なぜ民主主義的な体制の下で秩序を保つことができているのか、同書はまさにその謎を解くカギを与えてくれる。氏は膨大な資料を駆使しながら、大陸的規模の国の現代史を、政治、経済、外交、文化などの諸側面から洞察しバランス良く描ききった。独立後インドの複雑な歴史を極めて明解な筆致で描き、インド現代史の理解に大いに資するものとして、国際的にも高い評価を得ている。

現在のグローバル化の中で多元化し混迷する世界において、インド現代史の経験こそ私たちに教訓と希望を与えてくれる光明の一つであり、その語り部であるグハ氏は、「福岡アジア文化賞 学術研究賞」にまさにふさわしい。

# 第26回 芸術・文化賞 受賞者



ミン・ハン

ベトナム/ファッションデザイン

Minh Hanh

## ●主な経歴

- 1961 ベトナム、ブレイク生まれ
- 1983 ホーチミン市美術大学卒業(グラフィック・デザイン)
- 1994 ベトナム、レガ・ファッションディレクター
- 1997 アジアコレクション(幕張)特別賞
- 1998 Mot Vietnam誌副編集長
- 2000 ベトナム・ファッション・デザイン研究所ディレクター  
ベトナム・コレクション・グランプリ創設  
フェ・フェスティバル、フェ伝統工芸フェスティバルにて上級芸術顧問
- 2001 ベトナム・ファッションウィーク創設
- 2006 フランス政府より芸術文化勲章シュヴァリエ  
ベトナム繊維アパレル協会理事  
ベトナム政府の委託によりアジア太平洋経済協力会議(ベトナム開催)の衣装デザイン
- 2014 イタリア-ベトナムファッション協議会設立委員

## ●主なファッションショーと展示会

- ◆「少数民族モン族のショー」(BigQ,ベルリン)1999.
- ◆「日越外交関係樹立30周年記念アオサイ・コレクション展」(清水寺,京都)2003.
- ◆「ベトナム・デイ」(ニューヨーク)2005.
- ◆「フェ少数民族のショー」(ロリアン,フランス)2011.
- ◆「アオサイショー」(舞台美術センター,サンノゼ,米国)2012.
- ◆「少数民族の布地と刺繍」(ローマ博物館,イタリア)2014.

## ●贈賞理由

ミン・ハン氏は、ベトナムを代表するファッションデザイナーである。氏は多民族を有する同国文化への洞察をもとに、アオサイと少数民族の刺繍や織物を融合させた現代的なデザインを創造する一方、みずからファッションショーや文化イベントを同国内はもとより世界中で展開した。さらには若手デザイナーの育成や市場の開拓にも取り組み、ファッション産業界の発展を促し、アジアに特有の美しい装いを生み出すことに大きく貢献してきた。

ミン・ハン氏は1961年にベトナム中部のブレイクに生まれ、激化するベトナム戦争の渦中をフェ、ダナン、サイゴンと移動しながらも、少数民族が纏う衣装の鮮やかな色彩に囲まれて育った。幼い頃から人形の服を縫い、11歳でアオサイの制服を縫い上げた。1983年、ホーチミン市美術大学を卒業後、新聞社に挿絵画家として入社し、ファッション新聞の企画や編集を通してデザインの才能を発揮した。その後、1986年に始まるドイモイ(刷新)政策の中、同国初のファッション研究所「レガ・ファッション」の運営を機にファッションデザインに転じていく。こうした創作活動に加え、みずから「ベトナム・ファッションウィーク」や「ベトナム・コレクション・グランプリ」等を立ち上げ、若手デザイナーの育成や市場の開拓を手がけていった。

この間、伝統工芸である絹織物を自らの作品に活用することで避らせ、少数民族に継承された刺繍や織物をデザインに取込み、現代的な感覚で大胆な色彩や柄の構成を追求した。それは単なる伝統の踏襲ではなかった。ミン・ハン氏は台頭する欧米ファッションの影響を意識的に相対化しながら、ベトナム固有の衣服文化と手仕事の技を再評価し、

多彩で豊かな創造的デザインを生み出している。

こうした努力が評価され、1997年、初の国際的な挑戦であったアジアコレクション(幕張)で特別賞を獲得した。2002年には、ベトナム初の世界遺産として知られるフェの王宮を舞台としたファッションショーをプロデュースし、現在もフェ芸術祭におけるアート・プログラム 上級芸術顧問として重要な役割を果たしている。さらに2003年、京都の清水寺において、日越外交関係樹立30周年を記念するアオサイ・コレクション展を奉納し、2006年には、フランス政府から芸術文化勲章シュヴァリエを授与された。あわせて欧米やアジアの各地でファッションショーを開催し、ファッション文化を通じたベトナムの魅力を世界に広く知らしめている。また、ベトナム航空客室乗務員のユニフォームや2006年開催のアジア太平洋経済協力会議(APEC)での各国首脳のコスチュームをデザインするなど、ベトナムを代表するデザイナーとしての業績を重ねている。

このように、ベトナム固有の文化の矜持を現代的な感覚でファッションに表現し創造を進め、若手の育成に取り組みながら、アジアのファッション文化の発展に貢献してきたミン・ハン氏は、まさに「福岡アジア文化賞 芸術・文化賞」にふさわしい。

# 第26回福岡アジア文化賞 授賞式

■日時:9月17日(木) 18:20~20:00

■会場:福岡国際会議場

## 式次第

第1部	受賞者紹介	受賞者挨拶とインタビュー
	主催者代表挨拶 福岡市長 高島宗一郎	特別披露 墨絵とデジタル映像によるパフォーマンス「上昇綺龍〜アジアをひとつに〜」
	お言葉 秋篠宮殿下	出演 墨絵アーティスト 西元祐貴
	選考経過報告 福岡アジア文化賞審査委員会 委員長 久保千春	映像制作 ○九州大学芸術工学府 ○モンブラン・ピクチャーズ(株) ○anno labo
	贈賞 福岡市長 高島宗一郎	
	市民代表お祝いの言葉	閉式



# 第26回福岡アジア文化賞 授賞式

映像による歴代受賞者の紹介と墨絵アートのオープニングで幕を開けた第26回福岡アジア文化賞授賞式。秋篠宮同妃両殿下ご臨席のもと各国の来賓、各界関係者、多数の市民が一堂に会し、式は華やかにスタートしました。

受賞者が客席から登場すると、会場には割れんばかりの拍手。これまでの功績をたたえ、受賞を祝う温かい空気にあふれました。高島宗一郎福岡市長が受賞者が100名を超えたことを紹介。「アジアと創る」をコンセプトに、福岡アジア文化賞をはじめとした「アジアンパーティ」の一連のイベントの中で、さまざまな交流を通して新しい時代のアジアの交流拠点を目指していく、と挨拶しました。

続いて、秋篠宮殿下よりお言葉を賜り、審査委員長の久保千春九州大学総長より選考経過が報告され、高島市長より受賞者に賞状とメダルが授与されました。市民を代表して大学生よりお祝いの言葉が贈られ、福岡インターナショナルスクールの可愛らしい子どもたちによって花束が贈呈されると、観客から大きな拍手が贈られました。

第2部では、受賞者による喜びのスピーチが行われ、市民の質問に答える形で「ミャンマーの民主化」「多様性のあるインドと現代におけるガンディーの思想」「伝統と創造」などが語られました。

最後に、墨絵アーティスト西元祐貴氏が、墨絵と九州大学の映像テクノロジーを融合させたライブパフォーマンスを披露。墨絵がキャンバスから飛び出してスクリーンいっぱいに広がり、観客を躍動感あふれる異空間へと誘って式は優雅に幕を閉じました。



客席を通って登壇する受賞者



大賞のタン・ミン・ウー氏への贈賞



花束贈呈

## 祝賀会

授賞式に引き続いて、各国・各界の来賓など多数の参加を得て祝賀会を開催。

久保審査委員長が「この祝宴は、福岡とアジア諸地域との長きにわたる交流の蓄積があればこそ実現できたものであり、本日も新しい出会いが生まれ、ご縁が続いていくことを願っております。」と開会を宣言。

その後、在福岡ベトナム総領事のブイ・クオック・タイン氏による乾杯のあいさつで祝宴がスタートし、各受賞者と同伴者を囲んでにぎやかな懇談が広がりました。



久保 審査委員長による開会あいさつ



ブイ・クオック・タイン総領事による乾杯のあいさつ



アジア・フォーカス映画祭からのゲスト エリナ・アライ・キズイ(キルギス・女優)のあいさつ



高島福岡市長による主催者代表あいさつ



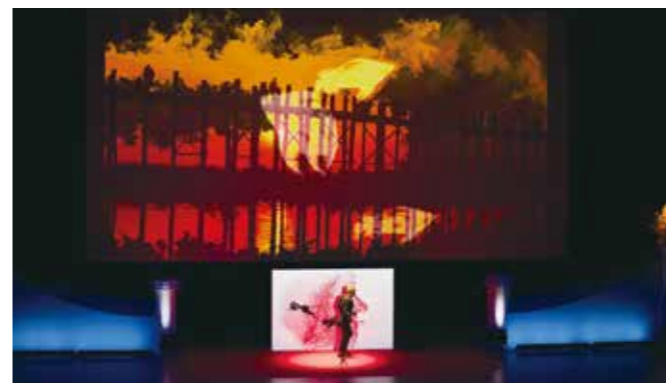
久保九州大学総長による選考経過の報告



受賞者に賞状とメダルを贈る高島市長



市民代表お祝いの言葉



特別披露のパフォーマンス



墨絵アーティスト西元氏(右端)と九州大学芸術工学府学生・地元クリエイターによるコラボレーション

## 秋篠宮殿下お言葉



本日、第26回福岡アジア文化賞の授賞式が開催されるにあたり、受賞される3名の方々に心からお祝いを申し上げます。

また、今回で受賞者が100人を超えたとお聞きし、受賞者の広がり感慨を深くするとともに、これまで本賞の発展に力を尽くしてこられた関係者に深く敬意を表します。

近年の国際社会におけるグローバル化の進展は、画一的な思考方法や生活様式をもたらした面がありますが、そのいっぽうで、各地の文化の独自性や多様性に対する関心が高まり、その重要性に対する認識を深めてきた側面もあると言えます。このようななか、福岡アジア文化賞は、アジアにおける固有で多様な文化を尊重し、その保存と継承に貢献するとともに、新たな文化の創造、さらにアジアに関わる学術研究に寄与することを目的として、それらに功績のあった方々を顕彰する大変意義深いものと考えます。

本日の受賞者も歴代の受賞者同様、文化の多様性に対する理解の促進と、そこから生まれる新しい文化の創造、そして深くアジアの文化や社会についての研究を進めてこられた方々です。未来の発展に貢献する優れた業績は、アジアに限らず、広く世界に向けてその意義を示すとともに、社会全体でこれを共有し、次の世代へと引き継ぐ人類の貴重な財産になることでしょう。

終わりに、受賞される皆様に改めて祝意を表しますとともに、この福岡アジア文化賞を通じて、アジア諸地域に対する理解、そして国際社会の平和と友好が一層促進されていくことを祈念し、私のあいさつといたします。

●大賞

タン・ミン・ウー



長い孤立を経たミャンマー  
これからの挑戦

秋篠宮同妃両殿下、高島市長、ご来賓の皆様、ご参会の皆様、今回、大賞を受賞しましたことを大変光栄に思います。

私は今回、初めて福岡を訪問しました。福岡は緑豊かで住みやすい都市であり、躍動した近代的な都市であるという印象を持っています。福岡から学ぶことは、ヤンゴンの都市計画にも生かすことができると思います。

ミャンマーの歴史を振り返ると、ミャンマーは世界とつながっていた時代には発展を遂げ栄えていました。それはミャンマーが新しい考え方を学び、取り入れようという意欲

に溢れていたからです。今、ミャンマーは何十年もの孤立からやっと脱却し、急速に近代化が進んで、いろいろな変化が起きています。この激動の時代に、ミャンマーの伝統、芸術、建造物をしっかり守っていくことが非常に重要になります。ミャンマーの強みは、どこにあるのか。それは単一の伝統、文化でなく、文化の多様性にあることをしっかり認めていくことが大事です。

ミャンマーには多くの人がさまざまな暮らしをし、民族、文化、宗教など、多様性に溢れています。これは祝福すべきことです。偏見の殻を破り、多様性の強みを見出し、そして包含的な21世紀型のアイデンティティを作っていくことがミャンマーのこれからの挑戦です。それができて初めてミャンマーは真に孤立から脱却を果たし、アジアの十字路にあるという立地を活用できるでしょう。

今回、優れた受賞者の方々の仲間に加えていただいたことを大変光栄に思い、また恐縮しています。ありがとうございます。

Interview



質問：民主化について、欧米社会と国内が求めるものは違いますか。

タン・ミン・ウー氏：大きな違いはないと思います。民主主義にはリーダーを選ぶ権利があり、ミャンマーも自由な選挙でリーダーを選びたいと思っています。また、国民は貧しい暮らしをしており、民主化によって経済的に改善することも望んでいます。

質問：これからのミャンマーは、アジアの中でどんな役割を果たすでしょうか。

タン・ミン・ウー氏：ミャンマーは貧しく脆弱な国ですので、門戸を開いていかなければ、将来にとって大きな損失になります。今、ミャンマーは、将来に向けて変化し、歩みを進めました。地図を見てもらえばわかりますが、アジアをつなぐ位置にあるミャンマーは陸をこえて人をつなぐ役割、架け橋になる役割を持っています。この5年、10年ができるかどうかの転換点になると思います。

●学術研究賞

ラーマチャンドラ・グハ



偏狭な考え方を乗り越え  
中庸な歴史家であるために

福岡市の皆様、学術研究賞を受賞しましたことを大変名誉に思います。

歴史家は偏った考え方を乗り越えていかないとけません。文献にあたる時は政府が用意した文書だけでなく、新聞や記述書の他、ソーシャルメディアをはじめたくさんメディアにあたって事実を見なければなりません。そして、他分野の見方から学ぶことが大切であり、愛国心やイデオロギーを乗り越える必要もあります。また、私はインドの歴史家ですが、歴史を公平に見ます。例えばインドネシアを見るときには、インドネシアから見ます。イン

ドネシアの歴史家がジャワ時代やオランダの植民地時代の膨大な歴史書を持っていたことは、私に大きな影響を与えました。

福岡アジア文化賞は国家の枠を越え、アジア全体に貢献した人々を評価するものです。このような榮譽ある賞をいただき、私は家族に感謝しなければなりません。お世話になった方、学校の先生や仲間、歴史研究家にも感謝しなければなりません。

私の著書に素晴らしい訳をつけてくださった佐藤宏先生にも感謝申し上げます。これまでで最も綺麗に訳し、日本の美的感覚で非常に美しい装丁をして下さいました。

ヒンドゥー教の聖典の一つ「バガヴァッド・ギーター」は、個人の義務に物理的な報酬を求めてはいけないうっています。自分がその仕事を愛しているからこそ、その仕事をやっているのだから。この受賞に対し、皆様に深い感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

Interview



質問：ガンディーの思想は、現代のインド社会でどのように生き続けているのでしょうか。

グハ氏：インドは言語も宗教も多彩です。ガンディーはそれを包括する形で存在しています。多様性を尊重する上で、インドはうまくいっていると思います。また彼の業績はインドにとどまらず、世界の市民権運動に

影響を与えました。ミャンマーのアウン・サン・スー・チーという傑出した人も彼の影響を受けています。彼を国民に持ったことは恵みでした。

質問：多様な豊かな国をどうまとめるのか。方向性は確立されているのでしょうか。

グハ氏：1枚の紙幣に17言語が記されているように、多様性の尊重においてインドは成功していると言えます。多言語、多宗教を抱えるEUも今、インドと同じ問題を抱えているでしょう。彼らは、50年も前に挑戦し成功を遂げたインドから学ぶことができます。

●芸術・文化賞

ミン・ハン



文化は世界を救うと信じ  
各国を文化で結びたい

秋篠宮同妃両殿下、ご参会の皆様、福岡アジア文化賞に名を連ねることができ、心から嬉しく存じます。この榮譽は私自身に与えられたものでなく、ベトナムの文化全体に与えられたものだと思っております。

この賞は長い歴史を持ち、威信ある賞です。初めに私からアジア文化の持続的な発展を強固に推し進めていच्छる福岡市、福岡アジア文化賞委員会、そして日本に感謝の意を申し上げます。皆さんは26年という長い年月の間、大変努力をして、アジア文化の本質を発展させて

いくことに力を注いでられました。

次に、私たちの国のはるか遠く険しい山岳地帯の小さな村々で、簡素な木の枠を使って機を織り、貧しく苦しい生活をしながら住んでいる人々に感謝します。この賞は、彼らが作ってくれた文化に対して大きな価値を与えてくれていると思います。この貢献によって文化というものがすべての人たちの心の扉を開き、日本や福岡でベトナムの人々との交流を生み出していると思います。

私は、もし世界がまっすぐでまっ平らなものになれば、文化というものは一つの民族を決めることになると思います。もしそれぞれの国が、それぞれの国で生まれた文化を理解し、文化を通じて国同士が固く結びつくことができれば、「幸せ」が人類に訪れることでしょう。

私は、このスピーチの最後を次の言葉で締めくりたいと思います。「文化が世界を救うのだ」と。どうもありがとうございました。

Interview



質問：独創的な衣装の特徴やそれらに込められた意味を教えてください。

ミン・ハン氏：機織りをしていた女性はベトナムとラオスの国境近くに住む少数民族です。彼女たちは魂から生まれるインスピレーションで織り、木や花など暮らしの中のものを柄にしています。彼女たちは生きる、死ぬというシンプルな人生を送り、それらが図柄になっています。

質問：伝統について、どう思いますか。

ミン・ハン氏：私にとって、伝統とは新しいことです。古いものから新しいものになるのが伝統です。ある時代の礎になり、その時代の人間が受け入れるということです。若い人が過去のを好まず、民族の歴史を変えてしまい、それを受け入れないのであれば、将来は見えません。それは自らのルーツを忘れ、自分たち自身を忘れてしまうことになります。私は今後、伝統と近代的なものを融合させていきたい。ファッションは文化です。自分たち固有の文化がなければ、将来はありません。伝統的な価値、文化的な価値を大事にしなければ、将来はないのです。

# 大賞

## タン・ミン・ウー

Thant Myint-U

●ミャンマー／歴史学

市民フォーラム

### 21世紀のミャンマーはどこに向かうか ～過去・現在・未来の対話～

■開催日/2015年9月19日(土) 13:00～15:00  
 ■会場/エルガーホール8F 大ホール  
 ■参加者/250人

〈第1部 基調講演〉

## ミャンマーの民主化を進めるためには日本をはじめ国際社会の協力が不可欠



ミャンマーは改革の時代を迎え、この4年間、期待が高まっています。政治改革により新たな憲法が制定され、政治環境が自由化されている状況にあります。経済改革が起り、和平のプロセスも進んでいます。ブラックホールの時代を経たミャンマーにとって、この数年間の変革はまさに奇跡だといえます。

1885年11月28日は、ミャンマーの歴史上とても重要な日です。千年にわたって続いた王制がイギリスによって放逐され、1940年ごろ

までビルマ(当時の呼称)はインドの州として統治されたのです。比較的に豊かな場所で、その間、中国やインドから何十万、何百万という移民がビルマにやってきました。ほとんどのビルマ人は最下層に落とされてしまい、上に立つ移民や海外企業に対する敵意が芽生えていきました。

独立後、軍が力を強め、外からの影響に対する反動を抑えるという形で62年に軍事政権が始まりました。独裁と、国際社会からの孤立が長く続き、とても貧しくなりました。しかし88年ごろから軍事政権を打倒しようという勢いが生まれてきました。

2011年に民政移管され、今まさに国際社会に復帰する努力をしているところです。国が外に開かれ、急激な変化が起こる中で、そして多くの少数民族がいる中で、国民としてのアイデンティティをどう培っていくかが重要になってきます。

民主化、和平、経済発展などは緊密に繋がっています。進化的で安定的なやり方で民主化に向かうためには、20の異なる武装グループとの和平プロセスを進めるとともに、電気や鉄道などのハードインフラや健康や教育などのソフトインフラに対する投資が必要です。中国、インド、タイなどに接する立地から急速に発展する可能性が高いです。

競争だけでなく、国際社会の協力が重要です。日本とミャンマーには長い歴史があり、政府も企業も人的交流を前向きに考えている。両国の関係は、将来的に必ず強化されるものと信じています。福岡の皆さんもぜひツーリストとしてミャンマーを訪れ、NGOや大学、そして一般の人たちとのコンタクトを持っていただきたいと願っています。

学校訪問

■実施日/9月18日(金) 14:00～15:00  
 ■会場/福岡市立福岡女子高等学校 視聴覚室

国際教養科の1～3年生120人を前に、タン・ミン・ウー氏は自らの生い立ちを振り返りながら、国連で働いた経験や現在の活動を紹介します。国際社会の中で仕事をする魅力や意義を話し、「日本人であることと女性であることは、国際関係の仕事をする上で大きなプラスになる」と力説しました。

生徒からの「高校生にできる平和維持活動は？」という質問に対しては、「サイバーセキュリティ分野では、若い世代が大いに貢献できる」と答えました。

〈明石 康氏講演〉

私は若い頃、日本人初の国連職員として、タン・ミン・ウー氏の祖父である第3代国連事務総長ウ・タント氏の下で働きました。そして私が重要な平和維持活動を指揮していた1990年代に有能な若手職員として活躍したのがタン・ミン・ウー氏です。さきほどの基調講演で彼は、その明晰な頭脳で自国の複雑な歴史を見事に解きほぐしてくれました。彼が示したのは、国際社会が懸命な援助の手を差し伸べればミャンマーの民主化は必ず成功するという見解です。われわれは民主化に向かうミャンマーの挑戦を温かく見守りつつ、その中で日本が果たすべき役割や責任を考えながら行動したいと思います。

〈第2部 対談〉



●対談者 明石 康 (公益財団法人国際文化会館理事長)  
 ●コーディネーター 竹中 千春 (立教大学法学部教授)

## 国際社会に参画するための課題と可能性を考える

タン・ミン・ウー氏と、国連時代の上司にあたる明石康氏の対談が、竹中千春氏のリードにより繰り広げられました。

ヤンゴンの近況としてタン・ミン・ウー氏は、スマートフォンなどのユーザーが50万人から1200万人に増えたことを紹介。「若者を中心に世界の消費者の中に組み込まれる中で、ミャンマーの何を残していくかが重要」と述べました。仏教の影響に話題が及ぶ中で、明石氏は「日本がミャンマーや東南アジア諸国との理解・友好を深める上で、仏教は一つのよりどころになる」と語りました。これからのミャンマーについてタン・ミン・ウー氏は「喫緊には、公務員部門の改革、土地制度の改革、エネルギー戦略の見直しなどが重要」と述べ、民政移管後初の総選挙への期待を表明しました。

会場からの「日本はミャンマーのために何が出来るか」といった質問に対し、明石氏は「企業の進出は双方の利益になる。教育や福祉の面でも貢献できる。長期的な発展のために役立つ支援など、日本らしい誠実さが大事」と答えました。

学校訪問

■実施日/9月18日(金) 17:00～18:00  
 ■会場/九州大学箱崎キャンパス 経済学部209教室

タン・ミン・ウー氏はミャンマーの長い歴史を振り返った上で現状を紹介し、重要なポイントとして「民政移管し民主化を目指す上での課題」や「隣の大国である中国の影響」などを示しました。「歴史的建造物の保護に取り組むようになったきっかけは？」という学生からの質問には、「当時住んでいたバンコクで都市開発のために古い建物がどんどん取り壊される状況を見て、ヤンゴンでは美しい建造物や都市景観を見続けたいと思った」と答えました。

# 学術研究賞

## ラーマチャンドラ・グハ

Ramachandra Guha

●インド／歴史学・社会学

市民フォーラム

### ガンディーとインド、そして世界

■開催日/2015年9月19日(土) 16:30～18:30  
 ■会場/エルガーホール8F 大ホール  
 ■参加者/200人

〈第1部 基調講演〉

## 独立運動・社会改革・宗教融和・預言者 4つの職業で革新的な取り組みを实践



環境歴史家としてキャリアを始めた私は、環境運動についての研究をする中でガンディーという人物に興味を持つようになりました。それは、1970年代から80年代にかけてヒマラヤで行われたチプロ運動で、農民たちが木に抱き付いて森林伐採に反対するという、ガンディーの非暴力抵抗の思想に強く影響された運動でした。

ガンディーの素晴らしさは、①独立運動家②社会改革者③宗教的多元主義者④預言者・未来主義者という4つの職業を同時にこなし、それぞれの中で革新的な取り組みを实践した点にあります。

イギリスからの独立を勝ち取る大規模な民族運動においては、他の植民地に見られるような武装闘争ではなく、非暴力抵抗運動を貫きました。中でも有名なのが、1930年の塩の行進です。

社会改革者としては、不可触民や女性に対する差別をなくす活動をしました。例えば、不可触民が寺院への出入りを禁止されていることに抵抗し、上層・中層・低層のカーストが一緒に寺院に入るという革命的な行動を起こしたり、非暴力で独立を勝ち取るために女性を行進に参加させたりしました。

ガンディーの生まれはヒンドゥーですが、キリスト教の友人も多く、イスラム教、キリスト教、仏教など多宗教の人たちが互いの宗教を尊重し、融和的に暮らす世界を目指しました。アシュラムという道場をつくり、さまざまな宗教の歌を歌ったり書物を読んだりする活動を行い、多宗教の融和に捧げた生涯でもありました。

さらに彼は未来を預言しました。1920年に行ったスピーチの中で「インドで西洋型の工業化を行えば、エネルギーを使い資源を枯渇させる」と警告し、1930年代には有機農業の促進を擁護しています。

当時、このようなガンディーの思想は常に批判され、攻撃を受けました。今日では多くの偉大な人々がガンディーを尊敬し称賛していますが、一方では彼を忌み嫌い、中傷する人がたくさんいるのも事実です。ガンディーほど世界中で物議を醸し、議論的となる人物は、これまでもこれからのいないでしょう。

私見では、ガンディーは非常に素晴らしいインド人思想家であり、道徳的な預言者で、ブッダ以降、最も偉大な思想家だと思っています。今日のインドでも、ガンディーを否定し忌み嫌う人がいますが、他国の方々がガンディーの素晴らしさを再発見してくれることでしょう。



〈第2部 パネルディスカッション〉



●コーディネーター 脇村 孝平 (大阪市立大学 大学院 経済学研究科 教授)  
 ●パネリスト 田辺 明生 (京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科 教授)

## ガンディーの思想や運動は現在の日本にも大きな意義

基調講演を受けて田辺明生氏はグハ氏に対し「ガンディーの多面的な魅力と、その思想運動の世界史的な重要性を、極めて明晰に論じた」と称えました。さらに、「ガンディーは全ての活動を通じて当時の支配的枠組みを問い直し、オルタナティブを探求したのではないかと」論じ、「現在の日本も、現実の多面性を深く認識し、多様な立場に共感を持って理解した上で、よき潜在的可能性を実践的に現実化しようとする姿勢を持つことが肝要だ」と議論を展開しました。

後半は会場からの質問も踏まえ、脇村孝平氏が「ガンディーは南アフリカの経験の中で、どんな人物から影響を受けたのか」と質問。グハ氏は、「ユダヤ教やキリスト教の女性と友達になるなど、南アフリカでの生活や人生そのものが大学であった」と答えました。現代のインドとガンディーの関係については、「ガンディーが全て正しいという考えを持つてはいけません。非暴力や宗教的多元性、環境の持続可能性についての考えは役に立つが、男女平等という点ではガンディーの考えを超えなければならない」と主張しました。

学校訪問

■実施日/9月19日(土) 10:10～12:15  
 ■会場/福岡大学付属大濠中学校

自身の子どもの中学生時代を思い出しながら、グハ氏は多くの民族、宗教、言語から成るインドの多様性と歴史について語りました。約200年に渡るイギリスの植民地支配、それに対する市民の武装蜂起、その後現れたガンディーの人となり、彼の非暴力的な市民運動によってもたらされた独立と平和についてわかりやすく話すグハ氏は、会場は静まり返り、生きた歴史の授業といった様相です。「今の国民のイギリスに対する感情は？」との質問に「インド人は英国人の良き隣人たれ」というガンディーの言葉を紹介し、「憎しみは次の憎しみを生む」と答えました。第二部は自身の青少年時代を振り返り、自然を体感すること、本を読むことをアドバイスしました。



〈第1部 基調講演、作品紹介〉

少数民族や日本の伝統的な織物から生まれる新しいファッションの形



ベトナムの人口は約8000万人、その14%を53の少数民族が占めています。彼らは素直でシンプルで素朴な精神を持っています。毎日の生活の中で見たり感じたことで感触や感情が刻々と変わり、織物の色や素材、模様も全く違ったものになります。昼と夜の作品が全然違ったりもします。それは私たちデザイナーにとって素晴らしいものですが、私たちが彼らと同様に気持ちの変化に応じてデザインを変えることは非常に難しいことです。それでも、モン族の人と一緒に食事や仕事をして、同じ部屋で寝泊りすると、彼らにシンパシーを感じ共感を持つことができます。共感を持ちインスピレーションを得ることが私のデザイナーとしての原動力になっています。

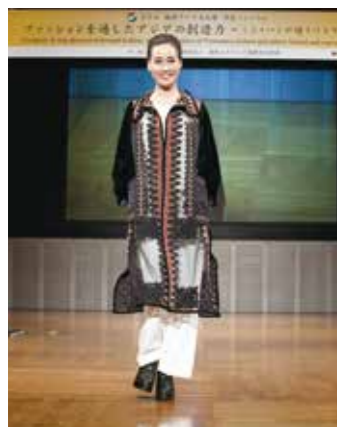
彼らの伝統的な仕事を守り、続けるためには？ 私は弟子によく言います。「これは戦いである。しかも終わりのない戦いである」と。若いデザイナーが伝統的な価値を理解するのは難しいことです。伝統素材をファッションに取り入れるのはとても大変なことだから。しかし若い彼らがその伝統的な価値を理解できたら、彼らは決してそれを捨てることはありません。これからは私たちの戦いは続いていきます。

私は古都プレイクで生まれました。少数民族も住んでいる土地で、幼い頃よく彼らについて行きました。彼らのことが大好きだったのです。私は美術学校を卒業しファッションの道を選びましたが、少数民族が織る伝統素材をファッションに使うことは、誰も認めてくれませんでした。誰も着たくないもの、文明的でないものをなぜ着うのかと。しかし私は負けませんでした。私がその伝統素材を選んだとき、私のインスピレーションが生まれたのです。私の気持ち、幼い頃感じた感触が蘇ってきたのです。その後トカムはベトナムの本質的な文化として認められ観光客のお土産にもなり、少数民族の人々は利益と誇りを得ることができました。

私の望みは時代や地域を超えた文化のクロスであり融合です。伝統的なものから生まれる本物の価値が今の時代には必要です。私はこの信念を次の世代に伝えていくつもりです。



タマイ族の女性が機織を実演



モン族の織物を取り入れた作品



和紙を取り入れた作品

〈第2部 パネルディスカッション〉



- パネリスト 新田 栄治 (鹿児島大学名誉教授)
- パネリスト 河地 洋子 (香蘭女子短期大学名誉教授)
- コーディネーター 藤原 恵洋 (九州大学大学院芸術工学研究院教授)

伝統を見出し、未来につなぐために必要なことは何か？

久留米絨や博多織の発展に尽力する河地氏は、ミン・ハン氏の久留米絨とチュールという異素材のリメイクに感動したと発言。新田氏は少数民族の機織り道具が2,500年前の墓からの出土品と同じであることを紹介。伝統が現代と複雑に絡み合い未来志向しているミン・ハン氏の作品に衝撃を感じたと語りました。

「伝統を未来につなげるために我々に何ができるのか」という観客の質問に対し、ミン・ハン氏は、「若者も伝統の魅力を感じることができるはず。ただ若者には進むべき方向を示し教育することが必要。伝統を失くすことは将来を失くすこと。」とかつよく答えました。

学校訪問  
実施日/9月18日(金) 13:20～14:50  
会場/香蘭ファッションデザイン専門学校

ミン・ハン氏は、自身や弟子の作品を着たモデルと登場。モデルらに生徒の間を縫うように歩かせ、素材や刺繍、織り方に注目するよう言いました。少数民族の手仕事を紹介しながら、「自分のルーツ、本質を大事にしてほしい。日本には博多織と久留米絨という財産がある。文化的な遺産を自分のクリエイティブな活動に使って」とも。「デザイナーに必要なものは？」という質問には、「四六時中ずっとデザインについて考えること。自分自身に向き合う時間は孤独だが、本当にそれが好きなら、どんな犠牲もいとわないでしょう。心からデザインを愛さないといけない」と答えました。



絨を取り入れた作品



着物の生地を取り入れた作品

国際交流基金アジアセンターとの共催企画

ミン・ハン氏 ファッションショー

- ◆日 時:平成27年9月19日(土) 17:00～18:00
- ◆会 場:警固神社

ミン・ハン氏作品のファッションショーを開催しました。会場は針供養の碑がある警固神社でファッションショー開催は初の試み。日本とベトナムの文化交流を目的としたこのイベント。香蘭ファッションデザイン専門学校の協力のもと、同校の生徒作品を皮切りに、ベトナム若手デザイナーViet氏の作品が紹介された後、ミン・ハン氏の約40着の作品が次々に披露されました。ベトナムのアオザイや少数民族の刺繍、織物、そして日本の和紙や着物などベトナムと日本の伝統文化を斬新に取り入れた艶やかな現代ファッションに、集まった300人の観客からはため息や驚きの声が聞かれました。

終了後はミン・ハン氏やファッションモデルと観客との交流の場となり、夕暮れの中、いつまでもショーの余韻が続いていました。



ミン・ハン氏とデザイナーたち



会場の警固神社



作品を披露

タン・ミン・ウー氏 特別対談 文化遺産を語る

- ◆日 時:平成27年9月19日(土) 19:00～20:30
- ◆会 場:住吉神社能楽殿
- ◆対談者:タン・ミン・ウー、西村 幸夫(東京大学教授、日本イコモス委員長)
- ◆進 行:河野 俊行(九州大学教授、国際イコモス副会長)

歴史建造物の保存活動を行っているタン・ミン・ウー氏とミャンマーのバガン遺跡の保存にかかわった西村氏により対談が行われました。ヤンゴンは何を保存すべきかを先に開発が進んだ他都市から学ぶことができる。世界レベルの観光地、歴史都市としての世界遺産の可能性を秘めている。保存を地域開発に繋げる視点が大事、など意見を交わしました。



タン・ミン・ウー氏



西村幸夫氏



対談の様子



会場の住吉神社能楽殿

歴代受賞者招へい企画



Tenjin (天神) × Apichatpong (アピチャツポン) × Project (プロジェクト)

Tenjin Apichatpong Project (TAP タップ)とは福岡アジア文化賞受賞者招へい企画として誕生した、2013年(第24回)芸術・文化賞を受賞されたタイの映画作家アピチャツポン監督と福岡の映画人との中長期的な交流プロジェクトです。

2016年1月 アピチャツポン監督作「トロピカル・マラディ」上映会  
福岡初上映!

2016年4月 アピチャツポン監督を福岡にお招きしてワークショップを開催し、福岡の映画関係者と「天神」をテーマにしたショートフィルムを制作

日時 2016年1月30日(土) 13:00～  
場所 福岡市総合図書館 映像ホールシネラ(福岡市早良区)  
今をときめく、福岡にゆかりある映画人によるトークショーも開催

アピチャツポン監督と福岡の映像クリエイターが協働して作品を制作 × 福岡の映像クリエイターや一般市民から映像素材を募集



アニメーション作家 水江 未来 アニメーション作家 幸 洋子 映像作家 橋 剛史

映像をコラボする協働作品

# 記者会見および広報活動など

## 受賞者記者会見

9月17日、授賞式に先立って受賞者記者会見を開催。冒頭に、高島宗一郎福岡市長が、日本とアジアを結ぶ拠点として発展してきた福岡市の特徴と、豊かな自然、食、文化に恵まれた魅力について、英語でプレゼンテーションを行いました。海外からのメディアを含む多数の出席者の前で、「Creative Fukuoka」をPRし、その後、受賞者の紹介、受賞者のスピーチと続き、質疑応答へ。今年は、福岡女子高校の生徒たちが記者会見に参加し、受賞者へ英語で「高校生に戻れるとしたら、自分にどんなアドバイスをしますか」などと質問しました。また、留学生の取材チーム HAKATAKKO PRESSも自分の出身国の受賞者へ質問。受賞者からは、「今できることに情熱を注ぐこと」「アイデンティティを持つこと」などという答えが返ってきました。

【受賞者発表記者会見】

- ◆日 時：平成27年9月17日(木) 12:00~13:20
- ◆会 場：福岡国際会議場501会議室



高島市長によるプレゼンテーション、福岡市の魅力をPR



記者会見の様子



海外記者からの質問



質問に答える受賞者



福岡女子高校の生徒たちによる質問



留学生取材チーム HAKATAKKO PRESS

## 広報活動

### 海外メディア向けプレスツアー

今年は、国際交流基金アジアセンターとの共催で海外メディア向けプレスツアーを初めて実施。ミャンマー、ベトナム、インドネシア、フィリピンなどのアジア各国のみならず、アラブ首長国連邦など世界各地から記者が福岡を訪れ、福岡アジア文化賞及び福岡の魅力幅広く取材しました。

#### 取材メディア

- ・Tribunews(インドネシア)
- ・Prothom Alo(バングラデシュ)
- ・WAM (UAE news agency)(アラブ首長国連邦)
- ・PINOY GAZETTE(フィリピン)
- ・The Myanmar Times(ミャンマー)
- ・The Irrawaddy Burma News(ミャンマー)
- ・Vietnam Television(ベトナム)
- ・Dan Tri Newspaper(ベトナム)
- ・フリーランス記者(米国)

◆日 時：平成27年9月17日(木)~9月18日(金)

◆取材先：授賞式、学校訪問、アジア・フォーカス福岡国際映画祭オープニング、福岡アジア美術館 ほか

### 留学生による取材チーム結成

受賞者国(ミャンマー・インド・ベトナム)の留学生による取材チームHAKATAKKO PRESSを結成。授賞式や各イベントを取材し、自身のSNS等で国内外に情報を発信しました。



プレスツアーに参加した海外の記者たち



HAKATAKKO PRESS

## 報道実績

【報道件数】  
国内：136件 国外：126件 計：262件 (2015年11月現在)

## 海外記者会見

6月の受賞者発表を受け、それぞれの受賞者の出身国で記者会見を開催し、現地政府機関や日本国大使館をはじめ、歴代の受賞者や現地メディアなど多くの参加をいただきました。海外記者会見では、福岡アジア文化賞の意義や受賞者の功績とともに福岡市の紹介を行い、その模様が各地で報道されました。

### 大賞/タン・ミン・ウー氏

- ◆開催地/ミャンマー(ヤンゴン)
- ◆開催日/8月9日(日)
- ◆場所/パークロイヤルヤンゴン
- ◆参加者数/140名

【主な来賓・出席者】

- ソー・テイン氏 (ミャンマー大統領府大臣)
- ラ・ミン氏(ヤンゴン市長)
- 丸山市郎氏 (在ミャンマー日本国大使館公使)



### 学術研究賞/ラマチャンドラ・グハ氏

- ◆開催地/インド(ニューデリー)
- ◆開催日/7月24日(金)
- ◆場所/ハビタットセンター
- ◆参加者数/80名

【主な来賓・出席者】

- ゴバルクリシュナ・ガンディー氏 (元・西ベンガル州首相)
- 八木毅氏 (在インド日本国大使館特命全権大使)
- アンシュ・ナンティ氏(2007年(第18回)福岡アジア文化賞 大賞受賞者)



### 芸術・文化賞/ミン・ハン氏

- ◆開催地/ベトナム(ハノイ)
- ◆開催日/7月7日(火)
- ◆場所/デウーホテル
- ◆参加者数/100名

【主な来賓・出席者】

- ヒュン・ヴィン・アイ氏 (ベトナム文化・スポーツ・観光省副大臣)
- 柳 淳氏 (在ベトナム日本国大使館次席公使)
- ファン・ファイ・レ氏(1996年(第7回)福岡アジア文化賞 学術研究賞受賞者)



# 福岡アジア文化賞 歴代受賞者名鑑

FUKUOKA PRIZE Roll of Honor 1990 - 2014

## 第1回 1990

### 創設特別賞



**巴 金**  
BA Jin  
(中国/作家) ●

『家』、『寒い夜』等、深い人類愛の溢れる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。

### 創設特別賞



**黒澤 明**  
KUROSAWA Akira  
(日本/映画監督) ●

「羅生門」はじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えた映画人に大きな影響を与えた。

### 創設特別賞



**ジョゼフ・ニーダム**  
Joseph NEEDHAM  
(英国/中国科学史研究者) ●

中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。

### 創設特別賞



**ククリット・プラモート**  
Kukrit PRAMOJ  
(タイ/作家・政治家) ●

大河小説『王朝年代記』ほか多くの傑作をもった文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。

### 創設特別賞



**矢野 暢**  
YANO Toru  
(日本/社会学者) ●

日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

**第2回 1991**

**大賞**  
**ラヴィ・シャンカール**  
 Ravi SHANKAR  
 (インド/音楽家・シタール奏者) ●

**学術研究賞**  
**タウフィック・アブドゥラ**  
 Taufik ABDULLAH  
 (インドネシア/歴史学者・社会学者)

**学術研究賞**  
**中根 千枝**  
 NAKANE Chie  
 (日本/社会人類学者)

**芸術・文化賞**  
**ドナルド・キーン**  
 Donald KEENE  
 (米国/日本文学・文化研究者)

豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。

東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会学者。

アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、「タテ社会論」等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。

大著「日本文学史」はじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究的国際的権威。

**第3回 1992**

**大賞**  
**金元龍**  
 KIM Won-yong  
 (韓国/考古学者) ●

**学術研究賞**  
**クリフォード・ギアツ**  
 Clifford GEERTZ  
 (インドネシア/文化人類学者)

**学術研究賞**  
**竹内 實**  
 TAKEUCHI Minoru  
 (日本/中国研究者)

**芸術・文化賞**  
**レアンドロ・V・ロクシン**  
 Leandro V. LOCSIN  
 (フィリピン/建築家)

東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。

インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。

東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

**第4回 1993**

**大賞**  
**費孝通**  
 FEI Xiaotong  
 (中国/社会学・人類学者) ●

**学術研究賞**  
**ウング・A・アジズ**  
 Ungku A. AZIZ  
 (マレーシア/経済学者)

**学術研究賞**  
**川喜田 二郎**  
 KAWAKITA Jiro  
 (日本/民族地理学者)

**芸術・文化賞**  
**ナムジリン・ノロバンザト**  
 NAMJILYN Norovbanzad  
 (モンゴル/音楽家)

中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の研究方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。

マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。

ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の研究方法論を創出した民族地理学の第一人者。

モンゴルの伝統的な民謡オルティン・ドーで豊かな表現力を持つ、傑出した音楽家。

**第5回 1994**

**大賞**  
**スパトラディット・ディッサクン**  
 M. C. Subhadradis DISKUL  
 (タイ/考古学・美術史学者) ●

**学術研究賞**  
**王 廣 武**  
 WANG Gungwu  
 (オーストラリア/歴史学者)

**学術研究賞**  
**石井 米雄**  
 ISHII Yoneo  
 (日本/東南アジア研究者)

**芸術・文化賞**  
**パドマー・スブラマニヤム**  
 Padma SUBRAHMANYAM  
 (インド/舞踊家)

タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界史的な位置づけに果たした功績は偉大。

華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。

インド古典舞踊パーラタ・ナーティヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の設立など教育面にも貢献。

**第6回 1995**

**大賞**  
**クンチャランングラット**  
 KOENTJARANINGRAT  
 (インドネシア/文化人類学者) ●

**学術研究賞**  
**韓 基 彦**  
 HAHN Ki-un  
 (韓国/教育学者)

**学術研究賞**  
**辛島 昇**  
 KARASHIMA Noboru  
 (日本/歴史学者)

**芸術・文化賞**  
**ナム・ジュン・パイク**  
 Nam June PAIK  
 (米国/ビデオ・アーティスト)

インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。

独自の基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。

テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

**第7回 1996**

**大賞**  
**王 仲 殊**  
 WANG Zhongshu  
 (中国/考古学者) ●

**学術研究賞**  
**ファン・ファイ・レ**  
 PHAN Huy Le  
 (ベトナム/歴史学者)

**学術研究賞**  
**衛藤 藩吉**  
 ETO Shinkichi  
 (日本/国際関係研究者)

**芸術・文化賞**  
**ヌスラット・ファテアリー・ハーン**  
 Nusrat Fateh Ali KHAN  
 (パキスタン/カワワーリー歌手)

古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。

イデオロギーにとらわれない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新知見をもたらした歴史学者。

中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。

イスラム宗教歌謡カワワーリーにおいて並ぶ者がない、パキスタンの国民的歌手。

**第8回 1997**

**大賞**  
**チェン・ボン**  
 CHHENG Phon  
 (カンボジア/劇作家・芸術家)

**学術研究賞**  
**ロミラ・ターパル**  
 Romila THAPAR  
 (インド/歴史学者)

**学術研究賞**  
**樋口 隆康**  
 HIGUCHI Takayasu  
 (日本/考古学者) ●

**芸術・文化賞**  
**林 権 澤**  
 IM Kwon-taek  
 (韓国/映画監督)

内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。

独立後のインド史研究を人類学の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。

フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。

韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

**第9回 1998**

**大賞**  
**李 基 文**  
 LEE Ki-Moon  
 (韓国/言語学者)

**学術研究賞**  
**スタンレー・J・タンバハ**  
 Stanley J. TAMBIAH  
 (米国/人類学者)

**学術研究賞**  
**上田 正昭**  
 UEDA Masaaki  
 (日本/歴史学者)

**芸術・文化賞**  
**R. M. スダルソノ**  
 R. M. Soedarsono  
 (インドネシア/舞踊家・舞踊研究者)

韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。

タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。

芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績を上げたインドネシアの代表的舞踊家。

**第10回 1999**

**大賞**  
**侯 孝 賢**  
 HOU Hsiao Hsien  
 (台湾/映画監督)

**学術研究賞**  
**大林 太良**  
 OBAYASHI Taryo  
 (日本/民族学者)

**学術研究賞**  
**ニティ・イヨウシーウォン**  
 Nidhi EOSEEWONG  
 (タイ/歴史学者)

**芸術・文化賞**  
**タン・ダウ**  
 TANG Da Wu  
 (シンガポール/ヴィジュアルアーティスト)

厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て「悲情城市」などの名作を生んだ世界的な映画監督。

日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究的の泰斗。

斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。

独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。

**第11回 2000**

**大賞**  
**プラムディヤ・アナンタ・トゥール**  
 Pramoedya Ananta TOER  
 (インドネシア/作家) ●

**学術研究賞**  
**タン・トゥン**  
 Than Tun  
 (ミャンマー/歴史学者)

**学術研究賞**  
**ベネディクト・アンダーソン**  
 Benedict ANDERSON  
 (アイルランド/政治学者)

**芸術・文化賞**  
**ハムザ・アワン・アマット**  
 Hamzah Awang Amat  
 (マレーシア/影絵人形遣い)

『人間の大地』はじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問い続けた作家。

厳密で実証的な歴史学的方法論によりミャンマー(ビルマ)史を塗り替えた歴史学者。

世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を拓いたアイルランドの政治学者。

マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリット(影絵人形遣い)。

**第12回 2001**

**大賞**  
**ムハマド・ユヌス**  
 Muhammad YUNUS  
 (バングラデシュ/経済学者)

**学術研究賞**  
**速水 佑次郎**  
 HAYAMI Yujiro  
 (日本/経済学者)

**芸術・文化賞**  
**タワン・ダッチャニー**  
 Thawan DUCHANEE  
 (タイ/画家)

**芸術・文化賞**  
**マリルー・ディアス=アバヤ**  
 Marilou DIAZ-ABAYA  
 (フィリピン/映画監督)

『グラミン銀行』を創始してマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。

市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ『速水開発経済学』とも称される学問体系を構築した。

タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。

民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

**第13回 2002**

**大賞**  
**張 芸 謀**  
 ZHANG Yimou  
 (中国/映画監督)

**学術研究賞**  
**キングスレー・M・デ・シルワ**  
 Kingsley M. DE SILVA  
 (スリランカ/歴史学者)

**学術研究賞**  
**アンソニー・リード**  
 Anthony REID  
 (オーストラリア/歴史学者)

**芸術・文化賞**  
**ラット**  
 Lat  
 (マレーシア/マンガ家)

現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。

スリランカにおける植民地時代の歴史研究を通じて歴史学研究的に多大な貢献をした歴史学者。

『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を拓いたオーストラリアの歴史学者。

マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

●は故人

●は故人

